長崎県工業技術センター 地域科学技術の理想と現実

長田　純夫
(長崎県工業技術センター)

地域科学技術とは

科学技術は地方と中央において違いがあるはずもなく，真理は時と所を越えて普遍である。しかし，四年前には通産省工業技術院に地域技術課が出来，平成四年の科学技術白書は地域と科学技術の関係をテーマとして取り上げた。

地域科学技術はこれまで公的にも明確に定義されていないが，筆者は〝地域人の，地域人による，地域人のための科学技術〟と理解している。科学技術の民主主義みたいなものかも知れない。

実行力無視の総合科学技術政策

一極集中現象に対する反省から〝地方の時代〟という美文のもとに，テクノポリス法，頭脳立地法，地方拠点法などが相次いで立法化され，好景気という時流にも乗り，全国津々浦々にテクノポリス，リサーチパーク，サイエンスビルが出現した。

しかし，言うまでもなく，科学技術はビジョンや建物だけで終るべきものではない。子供に勉強室を与えたり，新しい勉強机を買ってやれば成績が上がるか，と言えばそうでもない。子供のやる気や素質も考慮した対策が同時に採られねば，勉強室や勉強机は真に生かされない。

理想を追わない研究者群

欧米の列強に追いつけ，と明治の先達が殖産工業，富国強兵に励んだお陰で，我が国は世界に比類のない県立の工業試験場，農業試験場，水産試験場を整備した。工業系試験場は今や180機関5500研究者を越え，クリントン政権が逆に羨ましがっているくらいである。

しかるに，戦後五十年の高度成長長期安定社会という条件下で，研究に不可欠のハングリー精神や闘争心が徐々に退潮し，県の研究者は一部の例外を除き，ほとんど家畜化しているのが現状である。

レストランに例えれば，メニューを作るのが行政であり，料理を作るのが研究者である。しかし，両者の構造的ミスマッチにより，数十億円～数百億円を投資して続々と開設される豪華な工業技術センターとは裏腹に中身は一向に詰まらないのが現状である。

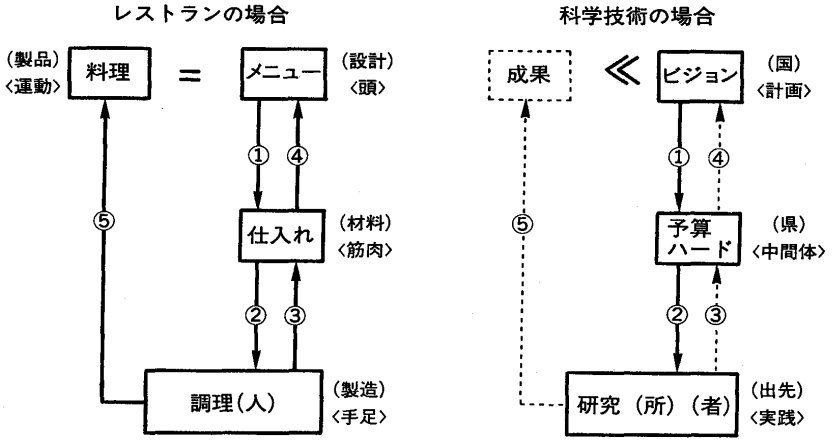
図は以上のような問題意識を多少単純化して描いたものである。

地域科学技術のニューパラダイム

公務員を評するのに，先例主義，無事主義，減点主義がある。しかし，この三主義は科学技術の原理原則に反する。つまり，研究公務員という立場は自ら矛盾を内包していることになる。

この矛盾を解決する唯一の方策は〝資源のない我が国は科学技術立国を避けられない〟という共通の価値観を日本人全員が認識し，同じ土俵で議論し合って行くことであろう。そして，相手の欠点を評論する前に，自分自身を評価する，つまり，自己反省することであろう。満足や言い訳は退歩に繋がり，反省は進歩に繋がるからである。

この目的のために我が工業技術センターでは〝一人一技一助(ひとりひとわざひとだすけ)〟運動を実践しているが，紙幅も尽きたようである。またの機会を期待したい。



プロジェクトレポート

九州地域の産業技術の発生と変遷の類型 ー技術の歴史は人の努力とロマンの歴史

成清　四男美
(九州通商産業局流通課)

九州は大陸との交流の玄関として，古くより中国，韓国の技術や文化さらには制度まで受け入れ，発展してきた壮大な歴史があり，いわば我が国の〝技術の発祥の地〟と言えます。

江戸時代には，長崎から近代西洋文明が導入され，1850年には鍋島藩に我が国最初の製鉄所が完成，1861年には幕府の洋式艦船を建造する長崎製鉄所が完成，1871年に長崎製鉄所は官営長崎造船所に引き継がれ，長崎，佐世保が近代造船業の発祥の地となる基盤となりました。

さらに，九州が大陸に近いという地理的優位性と港や鉄道などの交通インフラに加え，九州の代表的資源である石炭をエネルギー源として，1901年に銑鋼一貫生産を行う官営八幡製鐵所